小　島　地　区
カ　ル　テ

データについて

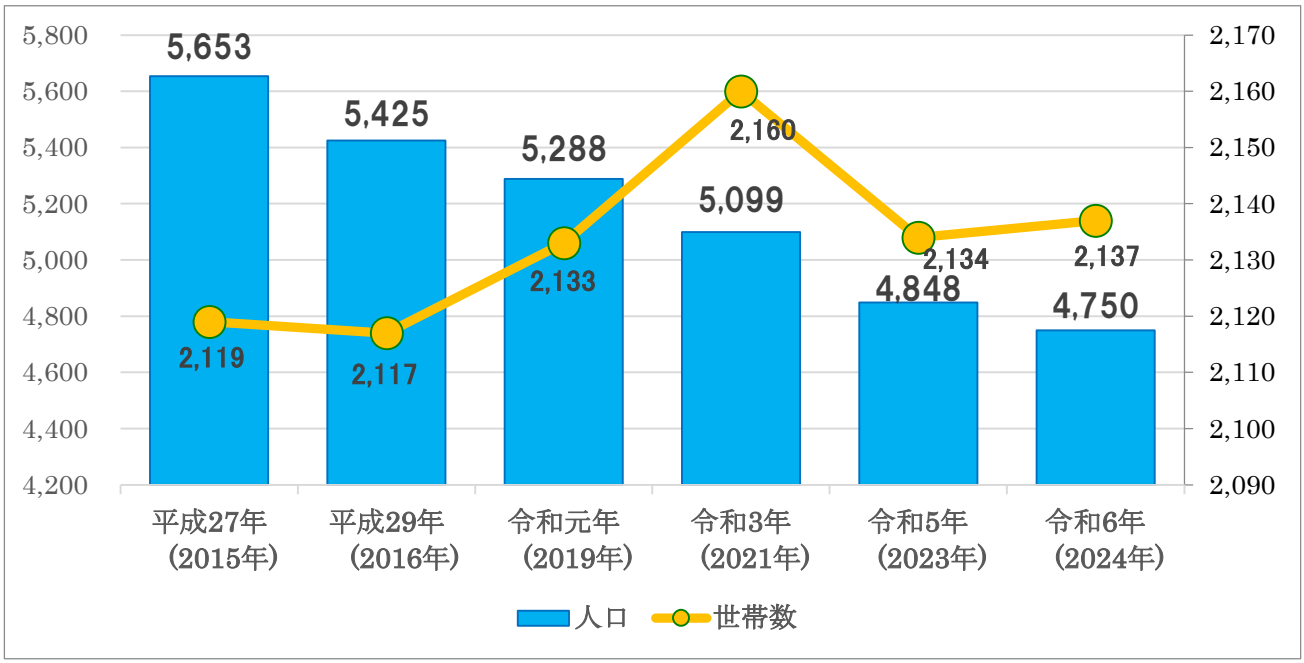
・カルテは住民基本台帳と自治会加入統計を利用しています。

・住民基本台帳は各年の 3 月 31 日の数値、自治会加入数は各年の 4 月 1 日の数値です。

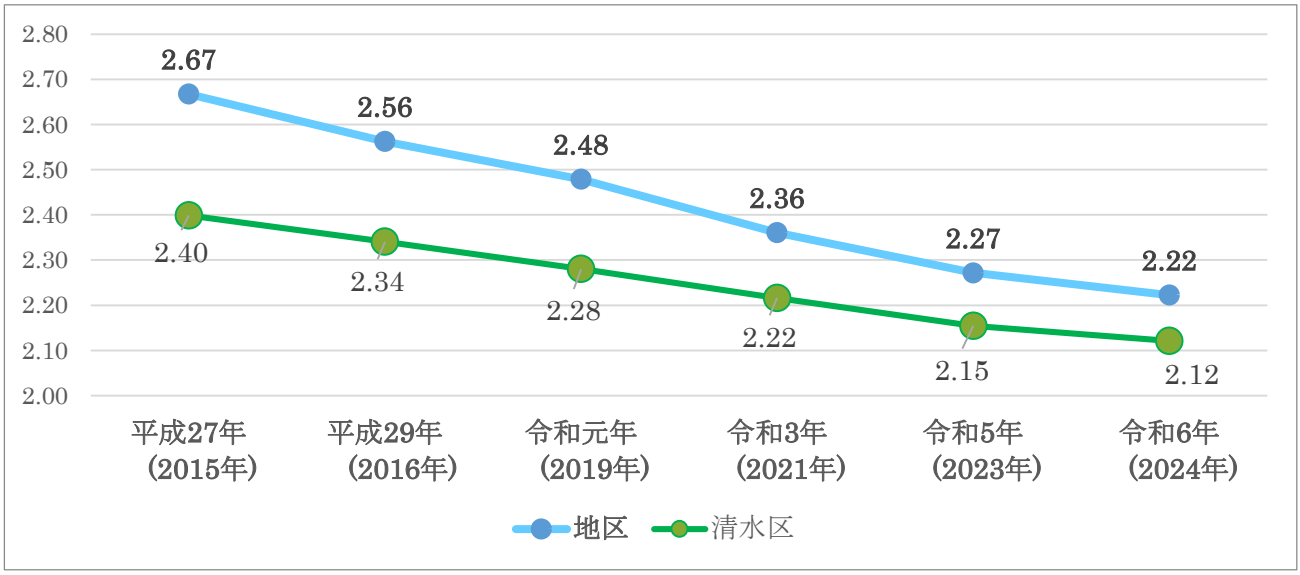
・町名は住民基本台帳を採用しているので、自治会名と一部異なる場合があります。

小島地区の人口特性　令和 6 年 3 月　4, 750 人　2, 137 世帯　2.22 人/世帯

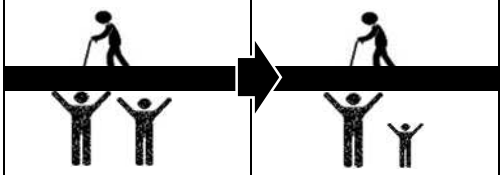
●人口・世帯数の推移



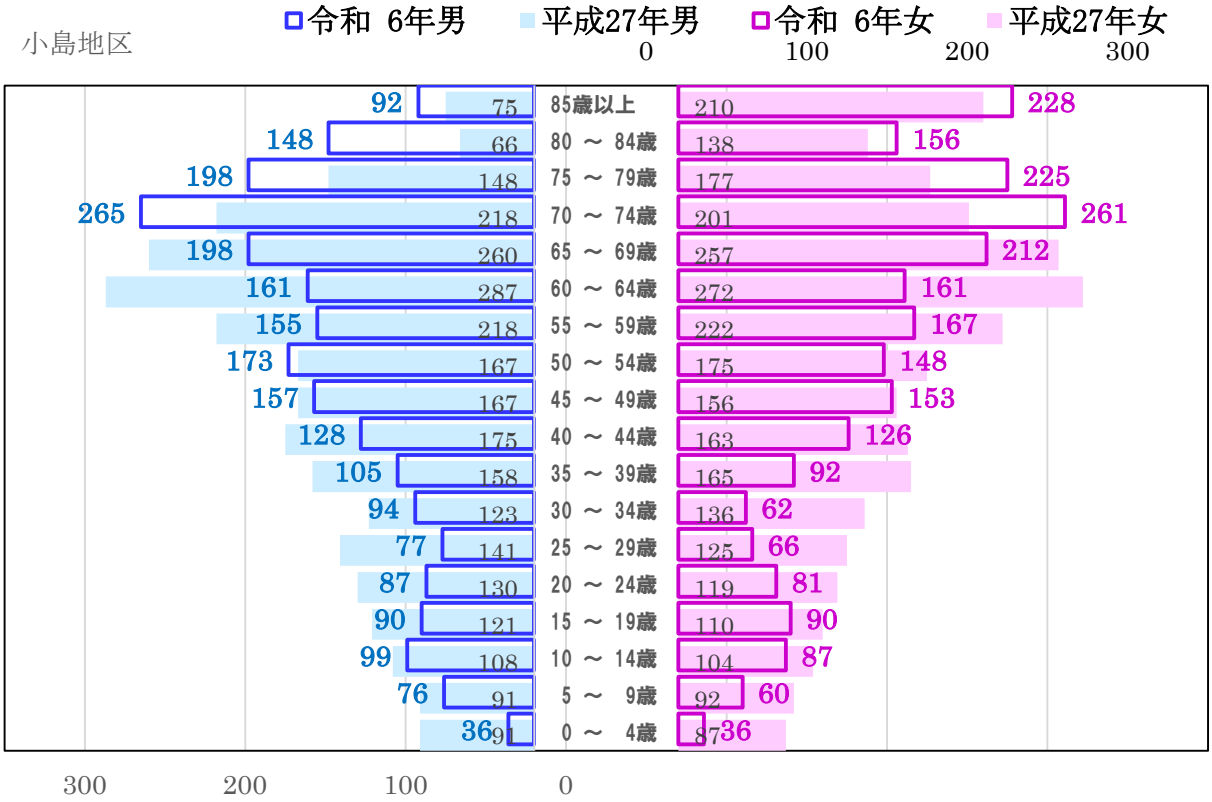
●一世帯当たりの人口推移



●65 歳以上の高齢者を支える生産年齢層（15-64 歳）

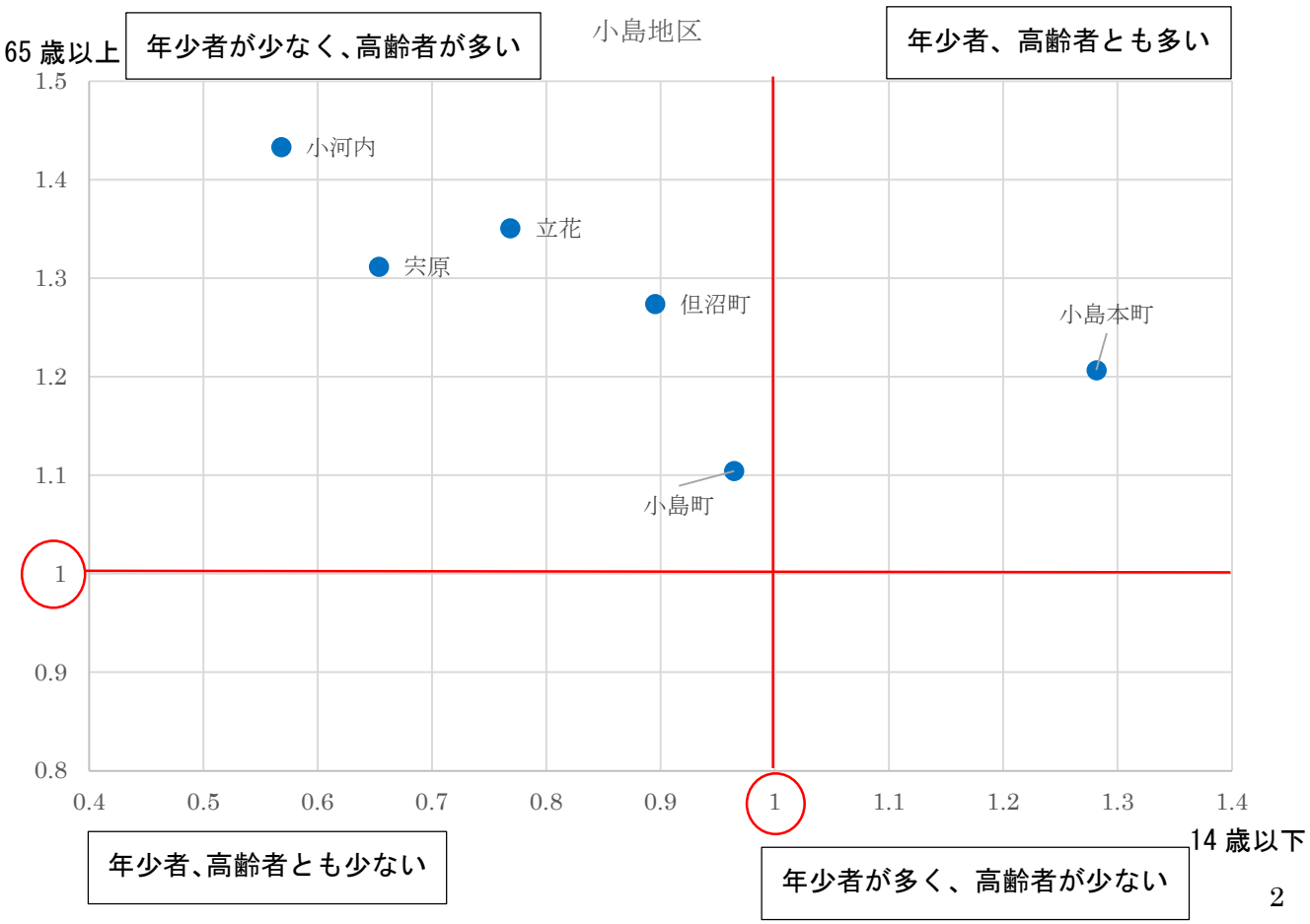
区　分	平成 27 年（2015 年）	令和 6 年（2024 年）
地　区	 1.90人	1.59人
静岡市	2.16 人	1.87 人
清水区	1.98 人	1.70 人

●人口ピラミッド【平成 27 年（2015 年）と令和 6 年（2024 年）の 5 歳階級別男女別構成】



●町別の 14 歳以下と 65 歳以上の割合分布（清水区の平均値を１とした場合）

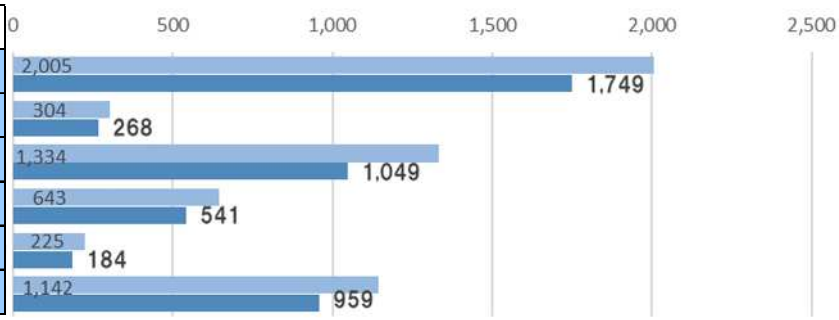
※年少者（14 歳以下）高齢者（65 歳以上）



●町別の伸び率と人口推移　【平成27年（2015年）と令和6年（2024年）の比較】

人口推移グラフ（上段平成27年　下段令和6年）

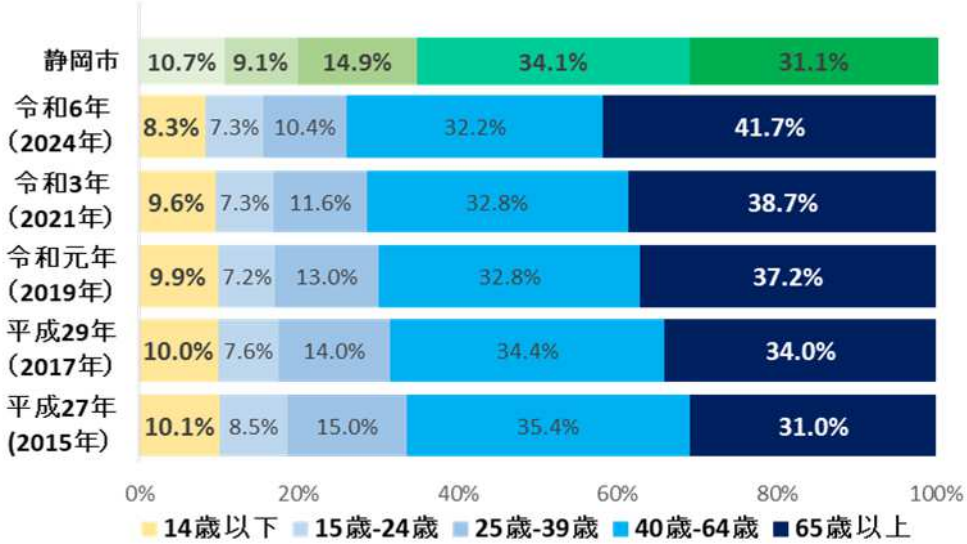
町名	伸び率
小島町	-12.8%
小島本町	-11.8%
小河内	-21.4%
宍原	-15.9%
立花	-18.2%
但沼町	-16.0%



		人　　口	
		平成 27 年（2015 年）	令和 6 年（2024 年）
小島地区	**−16.0%**	**5,653**	**4,750**
静岡市	−5.3%	713,564	675,610

●町別人口区分別割合

・年齢５区分別人口割合の推移



※15-24 歳は高校から社会人（大学修士課程含む）　25-39 歳は社会人（大学博士課程含む）

・令和６年人口３区分別：

市の割合より

青字　14 歳以下の割合が低い場合

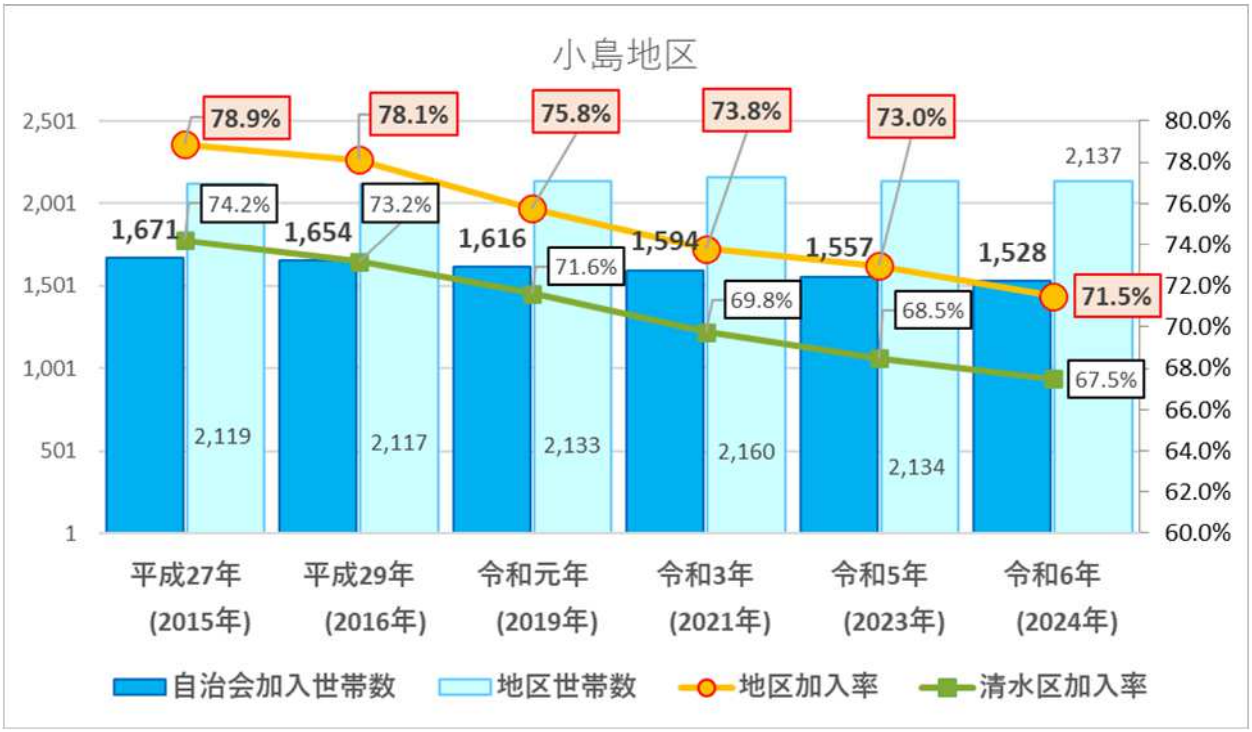
赤字　65 歳以上、75 歳以上の割合が高い場合

町 名	令和6年階級別割合		
	14歳以下	65歳以上	そのうち75歳以上
小島町	9.5%	36.9%	18.9%
小島本町	12.7%	40.3%	19.4%
小河内	5.6%	47.9%	27.3%
宍原	6.5%	43.8%	20.7%
立花	7.6%	45.1%	22.8%
但沼町	8.9%	42.5%	23.4%
小島地区	8.3%	41.7%	22.0%
清水区	9.8%	33.0%	19.3%
静岡市	10.7%	31.1%	18.0%

●自治会加入状況

令和６年

加入率	地　区	71.5%	加入世帯数	1,528 世帯
	清水区	67.5%	住民基本台帳世帯数	2,137 世帯



小島地区コメント

・人口は減少傾向を示し、世帯数は増加傾向にあります。世帯人数が減少していることから、単身世帯や小家族化が進んでいるようです。

・人口減少地区は町内全てに見られます。

・令和 6 年の 65 歳以上を1人支える生産年齢(15 歳から 64 歳)が市の 1.9 人より少ない 1.6 人で減少傾向にあり、若い世代の地区や自治会活動等への負担が増えることが見込まれます。

・さらに、自治会の加入率は区の値 68%より高い 72%ですが年々減少傾向が見られます。40 歳から 64 歳の自治会活動等で中心的に活躍を期待される層の減少も見られます。

小　島　地　区

地名のゆかり

明治22年に、小島、但沼、立花、小河内、宍原の各村が合併したとき、最も大きな村 で江戸時代に陣屋のあった「小島」の名を新しい村に付けました。

但沼には天武天皇の皇子舎人親王に関する伝説があり、立花には万葉集の防人の歌に出てくる“橘の美恵利の里”と言われていますから、この地区にも遠く奈良朝以前から人が住んでいたものでしょう。

戦国時代になると北條氏、武田氏、徳川氏などの勢力争いで、興津近辺が幾度か戦場となったため、甲州へ通ずる要路にあたる小島地区も人馬の往来が繁くなりました。

江戸時代の宝永元年（1704）、小島藩１万石の大名松平信治は、小島の酒瓶神社西方に陣屋を構えました。その石垣は今も残されています。

小島の地名は、平安末期の総国風土記に「庵原郡雄島、公穀三百二十束…」と記されているように、昔、「雄島」と書かれていたものが、いつの間にか「小島」となったものです。

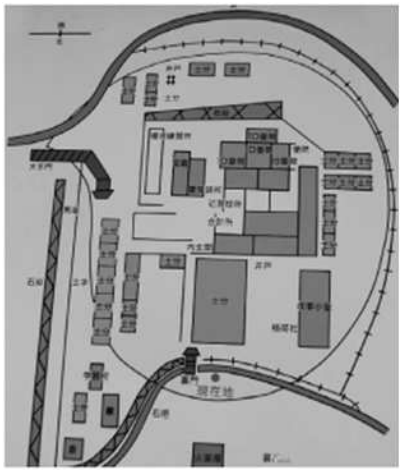
小島城の石垣

小　島　藩

小島藩、松平氏の素譜では、乗清、正勝、重信、信孝、そして治になります。

信治は、戸田和泉守重恒の二男で、元禄４年（1691）奥詰、同５年には御小姓、下野守、同11年、武蔵、上野の領地を駿河国有度、庵原、安倍の３郡に移し、同12年、領地の御朱印を受け、５年後の宝永元年（1704）正月、庵原郡小島に居所を構えました。

その後、信嵩、昌信、信義、信圭、信友、信賢、信進、信書、信敏で明治を迎えます。



小島陣屋跡見取図

小　島　城

小島バス停から西へ歩いて５分ぐらいのところにある台地の上に、小島城の名残をとどめる石垣が残っています。

これは、江戸時代の宝永元年（1704）に、小島藩１万石の大名、松平信治が築いたものです。

松平家は徳川家の親藩で、初代の松平信孝が元禄11年（1698）にここに封じられて以来、明治維新によって廃藩になるまで、14代にわたって安倍、有度、庵原の30か村を支配しました。

小島城の石垣

幕府は、ここが東海道に近く甲州への入口にも当たるという、戦略上重要な地点だったことと、それまで天領や旗本の領地だったため幕府の支配が十分行き届かなかったことから、大名を置いたのだと言われています。

城の広さはおよそ13000㎡で、周囲に石垣を巡らし、内部には、書院、武道場、学問所、砲術練習場、家来の住居などを備えた、小藩としての典型的な陣屋でした。

しかし、明治維新で廃城となり、しばらく小学校として使われていましたが、昭和３年に建物が取り壊されてしまいました。

舎人親王祭典

親王ばやし

但沼に舎人(とねり)親王（天武天皇の皇子で日本書紀を編さんした人）の社がありますが、昔、ここには大きな社殿があって、毎年お祭りが催されていたと伝えられています。また、その付近に、「親王森」もあって、巨木が生い茂っていたと言われています。

親王さんのお祭りは、毎年、お日待ちの10月17日に、但沼神社の祭典も兼ねて行われます。このお祭りの呼び物は、市の文化財に指定されている「親王ばやし」でしょう。

かつては、山車(だし)の上で演奏しながら、但沼近辺を練り歩いたそうですが、今では保存会の人たちが社近くの農協共選場で、大勢の人を前に演奏しています。

親王ばやしは、古くから伝えられているもので、太鼓、笛、かねの賑やかな響きに踊りも加わる、大変楽しいおはやしです。

立　花　池

今はひっそりの立花池

立花山の頂に立花池があります。その池の周りを馬場にして、大正の初めごろまで、毎春１回草競馬が開催されていました。

農耕馬や馬力馬を近在から集めて競争させ、興津はもちろん、岩渕や江尻の方からも見物人が登ってきて、その日は寿司や酒の立ち売りもでていて、大変な賑わいでした。

「舎人親王　親王ばやしで受け継がれ 」

天武天皇の皇子で『日本書紀』の編者として知られる舎人親王（676～735年）。但沼には、親王がこの地で没したという伝説があります。

江戸時代、但沼の堀池秀次郎（天保５年没）という人が、親王の霊を慰めるために祠（舎人親王神社）を建立しました。

その頃から舎人親王祭典のおりに、奉納されてきたのが『親王ばやし』です。笛や太鼓、鉦などの楽器とお囃子にあわせて舞い踊るこの民俗芸能は、昭和52年に市指定無形民俗文化財に登録されました。

現在も地元の親王ばやし保存会の皆さんによって大切に守り伝えられています

かたりべクラブ提供